

# 地域に暮らす障がい児（者）への発達支援

— 北海道文教大学 スマイル・プロジェクトの取り組み —

鹿内あずさ・小塚美由記・村上 優衣・笠見 康大・白幡 亜希・  
服部 裕子・佐藤 明紀

抄録：平成 28 年（2016 年）に児童福祉法が改正され、対象児と家族のために必要な在宅ケアサービス、および学校や地域で「児の発達支援」「地域に必要な社会資源の開発」が必要であるとされている。こうした必要性を背景とし、本研究では、平成 29（2017）年から平成 31（2019）年度までの 3 年間、当学で看護学・理学療法学・作業療法学・こども発達学・栄養学を学ぶ学生が、当学周辺や学生の通学経路近郊の地域に暮らす疾病・障がいを有する児（以下、対象児）と、当学企画イベントの開催や対象児の暮らす場に赴くなどを通して関わりを持ち、対象児の「もてる力」に気づき、高めるとともに、自身の学びを積み重ねることを目的に取り組んだ。この取り組みに参加した学生は、疾病に対する知識に加えて、対象児の身体的状態を理解するために、人体構造学・解剖学・生理学等の知識が必要であること、更には発達に関する知識や生活支援のための制度の理解が必要であることへの気づきを得るとともに、対象児の強みに着目し、その強みを伸ばす支援を考えるまでに至っているほか、在学中に自身に必要な専門的学習や卒業後の専門職の具体的なイメージを持つことができていることが示唆された。本研究は、北海道文教大学共同研究費の助成を受けて実施した。

キーワード：地域，障がい児（者），発達支援

## 1. はじめに

障がい者の権利擁護に向けた取組が国際的に進み、日本でも全ての国民が、障害の有無によって分け隔てられることなく共生する社会の実現に向け、平成 25 年（2013）には「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）」が施行、平成 28（2016）年には児童福祉法が改正され、その後、各地域で取り組みが始まった。改正児童福祉法では、対象児と家族のために必要な在宅ケアサービス、および学校や地域で行う必要のある「児の発達支援」「地域に必要な社会資源の開発」が必要であるとされている（厚生労働省、2018）。また、医療的ケア児への在宅ケアサービスと発達支援の充実を図るよう都道府県、および自治体、教育委員会等にその義務が明示され、北海道においても「北海道小児等在宅医療連携拠点事業（Yell）」として、毎年「自治体等の実践から学ぶ - 医療的ケア児の支援体制 -」の報告会が開催されている。障がいを有する児（者）の中には、医療的なケアを必要とする子どもも多く含まれており、専ら自宅など同じ環境で過ごすことに伴う課題がある。同年代の友人と遊び、交流する機会や多様な環境に触れる機会が少なくなると社会経験が乏しくなってしまう、年齢に応じた成長や発達が阻害されてしまう影響が生じる可能性がある（厚生労働省、2018）。自宅や学校以外に過ごす場所として、医療的ケアに対応できる看護師がいる児童発達支援、及び、放課後等デイサービスの整備が求められており（厚生労働省、2018）、障がいをもちながら在宅で生活している児童・生徒が、当たり前に行きたい学校に行くことの支援、自由に外出することへ

の制限を少なくするために、医療・教育・福祉の連携を図りながら、在宅での生活をより充実したものにするため、ソフトとハード両面からの環境整備が必要な現状にある。

本プロジェクトでは、平成 29（2017）年から平成 31（2019）年度までの 3 年間、大学のある恵庭市や周辺の地域に出向き、学生と教員がともに考える機会を作り、疾病・障がいをもつために在宅で療養生活を営む児（以下、対象児）に対して、看護学・理学療法学・作業療法学・こども発達学・栄養学を学ぶ学生が大学における企画イベントの際や対象児の暮らす場に赴き、関わることで、対象児の「もてる力」を高めることを目的に取り組みをしてきた。企画したプログラム後に学生自身が学んだ内容について、データ収集し、学生が対象児および保護者との関わり、および、複数学科の学生の学問的交流を通して、学生が各々の専門分野の基礎学習の重要性への気づきを得た 3 年間の活動を報告する。

## 2. 目的

本プロジェクトの 3 年間の活動と参加した学生が対象児および保護者との関わり、および、複数学科の学生との交流を通して得た学生の学びから専門職を目指す意欲を高めるための今後の活動について検討することを目的とする。

## 3. 方法

### 3.1 対象者

北海道文教大学人間科学部に在籍し、研究の趣旨に同意が得られた学生である。

### 3.2 データ収集方法

同意を得られた学生に対して、定期的なフォーカス・グループ・インタビュー（Focus Group Interview：以下、FGI）、および、訪問後に活動内容の考察を記述したアンケートや記録物（学生が専門分野の既習の知識を用いて、対象児の成長発達を促すアプローチ内容、対象児に合わせた遊びや学習の内容）から学生が学んだ内容をデータとした。

### 3.3 分析方法

実施した活動後に、以下の項目について、FGI、および、アンケートと学びの記録から得られたデータを質的記述的に分析した。

- 1) 学生が対象児の「もてる力」を高めるために必要だと考えて行ったこと
- 2) 学生が対象児および保護者との関わりを通して得たこと

### 3.4 倫理的配慮

学生の本研究への参加は自由意思によるものとし、研究内容（目的・方法、結果の公表）について、書面と口頭にて説明し、同意書への記載を持って同意を得た。学生の授業が無い日時に活動を行う旨を合わせて説明した。また、学生が関わる対象児とその保護者に対しては、研究者から直接、または、施設の担当職員から書面と口頭で説明し同意を得た。本研究は、北海道文教大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：30024）。

## 4. 結果

本研究における3年間の活動概要、及び、学生の学びについて、年度ごとに示す。

なお、活動を進めていくために教員メンバーによる定期的な会議を行い、活動の内容を検討した。

### 4.1 1年目の活動(表1)と学び

2017年4月～9月／10月～2018年3月

対象児(B市・中学3年生・SMA:脊髄性筋萎縮症I型)に対して、看護学科学生と健康栄養学科学生と教員が月に1～2回の頻度で自宅に訪問し、意思伝達装置を使用したコミュニケーションにより、交流を図った。参加した学生は、看護学科3年生4名、健康栄養学科学生2名、同行した教員は、看護学科3名、健康栄養学科1名であった。学生は、対象児の自宅に訪問し、家族と共に過ごす姿を見て、保護者から思いを聞いたりすることで、普段の暮らしを想像し、対象児の身体に起こっていることを考え、性格や興味など、対象児の強みに注目した関わりを考えていた。

訪問後の学びの記録とFGIから見えてきた学生の学びは、対象児との関わりによって、学生自身が専門的な知識を活かした関わりについて考える機会となり、同行した他学科の学生の気づきからも学科ごとの専門性について考え、学科の強みについて考える機会となっていた。



図1 意思伝達装置を使うAちゃんと学生のコミュニケーション場面

### 9月2日(土) チャリティウォークへの参加

4月から関わっているAちゃんと共にチャリティウォーク(障がい者の旅行支援のメイク・ア・ウィッシュ・オブ・ジャパン札幌支部)に参加した。

学生は人工呼吸器を積んだ車椅子を初めて押して「思ったより重く、力が必要だと思った」「いつも押しているお母さんが大変だと思った」「歩きながらだと意思伝達装置が揺れて、Aちゃんとのコミュニケーションが難しかった」「人工呼吸器がどうなっているのかもっと知りたいと思った」「一緒に歩けて楽しかった」と語っていた。



図2 2017 チャリティウォーク終了後の記念撮影

## 10月21日（土）医療的ケア児への支援の実際の講習会

学生は、地域の保健師活動の実際を知り、地域の関係職種との連携の重要性に気づき、一方で、学生としてどんな協力ができるのかについて考察していた。地域のケアシステムを自治体の特徴と合わせて知ることが重要だと語っていた。

表1 2017（平成29）年度の活動概要【1年目】

活動日	内容	学生	教員
4月～9月	対象児：中学3年生Aちゃん（B市・中学3年生・SMA：脊髄性筋萎縮症I型）に対して、看護学科学生が2名と教員が月に1回頻度で自宅に訪問し、意思伝達装置を使用したコミュニケーションにより交流を図る。	看護学科3年生4名 健康栄養学科3年生1名	看護学科4名 健康栄養学科2名
9月2日（土）	メイク・ア・ウィッシュ・オブ・ジャパン 札幌支部 主催 チャリティ・ラン・アンド・ウォーク 参加児童：1名（B市・中学3年生・SMA：脊髄性筋萎縮症I型） 会場：札幌市豊平橋 豊平川右岸	健康栄養学科3年生1名 こども発達学科3年生2名	看護学科2名 健康栄養学科1名 こども発達学科1名
10月21日（土）	北海道小児等在宅医療連携拠点事業 第1回 YeLL 実践検討会－自治体等の実践から学ぶ－医療的ケア児の実践体制〈保健編〉（八雲町・芽室町）	こども発達学科1年生3名 看護学科1名	看護学科4名 こども発達学科1名 *後日、資料を元に参加出来なかった学生への伝達講習を行なった。
10月～3月	対象児：中学3年生Aちゃん（B市・中学3年生・SMA：脊髄性筋萎縮症I型） 訪問により意思伝達装置を使用したコミュニケーションと交流 場所：Aちゃん自宅	看護学科3年生4名	看護学科3名 健康栄養学科2名

## 4.2 2年目の活動（表2）と学び

2年目には障がいをもつ児童の発達支援に関する研修会に積極的に参加し、学生が授業等で参加が難しい場合は教員から後日伝達講習を行った。恵庭市の子ども発達支援センターの放課後デイサービスの担当職員から本プロジェクトについて問い合わせを受けて、数回の打ち合わせ会議を経て、12月に本学を会場に2時間のプログラムを教員の助言のもとで学生が企画した「クリスマス会（調理体験&ものづくり体験）」を実施した。調理体験は、健康栄養学科の学生が企画し、ものづくり体験は子ども発達学科の学生が企画し、他学科の学生が参加対象児に付き添った。学生は、他学科の学生の対象児に対する対応と自身の対応の違いについて振り返り、語っていた。

表2 2018（平成30）年度の活動概要【2年目】

活動日	内容	学生	教員
6月23日（土）	北海道小児等在宅医療連携拠点事業 第2回 YeLL 実践検討会－自治体等の実践から学ぶ－医療的ケア児の実践体制〈教育編〉（名寄市・札幌市） 会場：北海道大学 人文・社会科学総合教育研究棟 203 教室	看護学科1名 こども発達学科3名	看護学科5名 こども発達学科1名 *後日、参加できなかった学生に対して資料を元に学生への伝達講習を行なった
8月23日（火）	進路研修会 テーマ：「肢体不自由児医療のこれまでとこれから～卒業後を見据えて～（肢体不自由児の医療的な支援の歴史・高等部卒業後の医療とのつながり）」 講演者：脳神経科医 高橋義男氏 会場：北海道拓北養護学校 体育館	学生参加0名	看護学科1名 作業療法学科1名 健康栄養学科1名 *後日、参加できなかった学生に対して資料を元に学生への伝達講習を行なった
9月1日（土）	メイク・ア・ウィッシュ・オブ・ジャパン 札幌支部 主催 チャリティ・ラン・アンド・ウォーク 参加児童：高等部1名（人工呼吸器装着・車椅子） 場所：札幌市豊平橋 豊平川右岸	健康栄養学科1年生1名／2年生2名 こども発達学科1年生1名／2年生2名（事前準備 看護学科1名）	看護学科1名 健康栄養学科2名 こども発達学科1名

活動日	内容	学生	教員
10月26日 (金) 18:00~20:00	恵庭市発達支援推進協議会・恵庭市発達障がいネットワークすくらむ主催：「子どもの発達講演会」生きづらさを抱える当事者の若者たちのおもい 会場：恵庭市民会館大ホール	看護学科2年生1名	看護学科2名
12月22日 (土)	恵庭市発達支援センターとの共同開催「中高生向けデイサービス～クリスマス会（ものづくり&調理体験）」 会場：北海道文教大学	健康栄養学科 こども発達学科 作業療法学科	こども発達学科1名 健康栄養学科2名 作業療法学科1名 看護学科2名

2018年9月1日（土）チャリティ・ラン・アンド・ウォークの「3Km ウォーク」にエントリーし、対象児（車椅子・人工呼吸器装着中／高等養護学校1年生）と共に参加した（図3・図4）。当日参加した学生は、看護学科1名、健康栄養学科2名、こども発達学科1名であった。事前準備のみの参加学生は、看護学科1名であった。

対象児との関わりの中での気づきとして、「もっと専門的に学んでいれば、少しでも心地よく過ごせるような援助ができたと思う」「これから専門職を目指す中で、励みになった。もっと勉強したいと思う」と語っていた。



図3 2018 チャリティ ウォーク 準備の様子



図4 2018 チャリティ ウォーク 終了後の記念撮影

#### 4.3 3年目の活動（表3）と学び

2019年度は、2018年度（2年目）に実施した恵庭市子ども発達支援センターの放課後デイサービスに通所している児童・生徒のためのプログラムに加えて、恵庭市内の放課後等デイサービス事業者（発達支援事業所：6施設）からの学生の企画したプログラムへの参加ニーズがあり、9月に本学体育館にて2時間のミニ運動会を企画運営した。表3に示した活動に加えて、前期の期間は学生と教員とがペアとなり、市内発達支援事業所に出向いて見学し、後期は学生が自主的に事業所へ連絡し、教員のサポートを得ながら対象児が参加する放課後デイサービスに参加した。

恵庭市子ども発達支援センターの小中学生向け大学体験（学祭時，図6）などの企画も加わり，対象児の社会体験（出店で好きなものを500円分購入するなど）を通じて，心の成長に加えて，社会的側面の発達についてもプログラムの企画を考える機会となった。学生は，対象児の計算の力を把握したり，対象児の好みや動きの特徴を捉えて声かけをしており，共に楽しむ様子であった。

子ども発達支援センターのクリスマス会は，作業療法学科の3年生がリーダーとなり，健康栄養学科・看護学科・理学療法学科・こども発達学科の学生と協働して企画し，本学で開催した。学生は，使用する物品の安全性を考慮して，対象児童の特徴を市子ども発達支援センターの職員から事前に情報収集し，学生・職員・教員との事前会議を複数回行った。



図5 2019 大学探検準備 1日学生証

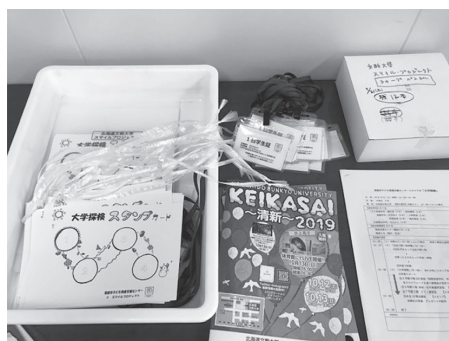


図6 2019 大学探検（学祭時）



図7 2019 チャリティウォーク準備の様子



図8 2019 チャリティウォーク当日の様子

表3-1 2019（平成31／令和元）年度の活動概要【3年目】

活動日	内容	学生	教員
4月20日 (土)	地域共生型ホームてまりの華との共同「地域食堂」企画（たこ焼き） 会場：江別市 てまりの華	看護学科1年生1名 作業療法学科3年生1名	看護学科1名 作業療法学科1名 こども発達学科1名
7月20日 (土)	第3回北海道小児等在宅医療連携拠点事業 YeLL[いえる]実践検討会 -自治体等の実践から学ぶ- 医療的ケア児の実践体制〈保健編〉 会場：北海道大学 学術交流会館 小講堂	参加学生0名のため資料を元に後日学生への伝達講習を行なう	看護学科1名 健康栄養学科1名
9月7日 (土)	メイク・ア・ウィッシュ・オブ・ジャパン 札幌支部 主催 チャリティ・ラン・アンド・ウォーク 会場：札幌市豊平川右岸	作業療法学科1名 こども発達学科4年生1名 ／1年生1名 健康栄養学科3年生5名 ／2年生1名／1年生1名	看護学科1名 作業療法学科1名 こども発達学科1名
9月10日 (火)	恵庭市発達支援センターとの共同開催「小学生向けデイサービス～ミニ運動会」 小学生15名 センター職員3名 会場：北海道文教大学 体育館	看護学科3年生1名 作業療法学科2名 こども発達学科4年生2名 ／2年生1名	看護学科1名 作業療法学科1名 こども発達学科1名

活動日	内 容	学 生	教 員
9月21日 (土)	恵庭市内の発達支援事業所（6事業所）との共同開催 「ミニ運動会（小・中・高校生）」 参加児童42名 職員29名 会場：北海道文教大学 体育館	看護学科3年生1名／1年生2名 作業療法学科4名 こども発達学科4年生2名 ／1年生3名 (準備のみ参加：理学療法学科4年生1名)	看護学科1名 作業療法学科1名 こども発達学科1名
10月12日 (土)	恵庭市子ども発達支援センターとの共同開催「大学祭での大学探検」 参加児童13名 職員3名 会場：北海道文教大学	看護学科3年生1名／1年生3名 作業療法学科4年生2名3年生1名 こども発達学科4年生1名 ／2年生1名	看護学科1名 作業療法学科1名 こども発達学科1名 健康栄養学科2名

表 3-2 2019（平成31 / 令和元）年度の活動概要【3年目】

活動日	活動内容	学 生	教 員
11月22日 (金) 18:30～20:00	恵庭市発達支援推進協議会・恵庭市発達障がいネットワークすくらむ主催（まちづくりチャレンジ共同事業） 「子どもの発達講演会」テーマ：家族支援のあり方について 会場：恵庭市民会館 中ホール	看護学科3年生1名	看護学科1名
12月21日 (土)	恵庭市発達支援センターとの共同開催：中高生向けサービス～クリスマス会「くるりんパンケーキ（調理体験）＆クリスマスカード作り（ものづくり体験）」	こども発達学科4年生1名／3年生1名／2年生1名 ／1年生3名 作業療法学科3年生1名／1年生1名 看護学科3年生1名／1年生3名	こども発達学科1名 作業療法学科1名 健康栄養学科1名 看護学科1名
1月18日 (土) 10:00～16:00	地域共生社会ワークショップ 地域共生社会の「多様性」を考える 対象：北海道内の大学生 会場：医療法人稲生会	作業療法学科3年生1名 理学療法学科4年生1名	看護学科1名
2月22日 (土)	地域共生型ホームあんずの華との共同「江別市介護ママの会～親子お楽しみ会」企画（ハンドマッサージ・ネイルシール・たこ焼き）	健康栄養学科2年生1名 こども発達学科2年生1名	看護学科1名 (看護学科OG1名)
3月10日 (火)	恵庭市子ども発達支援センター「小学生向け地域交流プログラム」：事業所を開催会場とするため、事業所内の教室の広さを考慮したプログラムを学生中心に企画していたが予定が中止となった。	こども発達学科1年生1名 ／4年生1名 看護学科1年生1名／2年生2名／3年生1名	こども発達学科1名 作業療法学科1名 看護学科1名

## 5. 考察

学生は、対象児との関わりから疾病に対する知識に加えて、人体構造学・解剖学・生理学等の知識が対象児の身体的状態を理解するために必要であること、発達に関する知識や生活支援のための制度の理解が必要であることへの気づきがあった。また、学生は、対象児の強みに着目し、その強みを伸ばす支援を考えており、在学中に自身に必要な専門的な学習や卒業後の専門職のイメージを具体的にしていた。

### 5.1 基礎学習の重要性への気づきと専門分野に対する学習意欲の変化

3年間の活動から学生が対象児と関わることで様々な気づきがあり、対象児の身体面を理解するためにもっと学ぶ必要がある知識は何かを考え、取り組む様子が認められている。また、対象児の発達を促す関わりについては、プログラムで関わった対象児を通じて、また、共に関わっている他学科の学生や上級生の支援の様子を通じて考察しており、医療系・教育系の学科で学ぶ学生それぞれに学習

意欲が高まっていた（鹿内 2017 2018 2019 2020, 村上 2019 2020, 山北 2019）。

プロジェクトを始めた当初は、学生メンバーは基礎的科目を履修し専門科目の学習を始めている3年生を中心に募集をしていたがほとんどの学科では4年次に専門科目の実習が始まり、プロジェクトに参加したくても叶わない状況があった。関わりのある対象児の保護者やサービス担当の職員からは、「まずこの子達を見て欲しい・知って欲しい」「1年生から会いに来てほしい」などの声もあり、全学年に募集をすることにした。そのため、2019年度（3年目）の活動では、各学科の1年生が上級生と共に企画を考える難しさと楽しさ、上級生をモデルとして自身も対象児に接するようにしたなどの声もあり、参加学生がさらに学習意欲を高めていけるようプログラム参加の機会を増やしていくことが必要と考える。

## 5.2 目指す専門職のイメージの具体化

それぞれの学生が持つ自身の専門職のイメージが活動に参加することで具体的になり、障がい児（者）支援の仕事に就きたい学生ではさらに具体的に実践したいケアが実践できる就職先をイメージしたりできることが学生の声から明らかとなっている。3年目には、学生時代に本プロジェクトに参加した卒業生が参加したプログラムもあり、今後はプロジェクトの卒業生との交流の機会も加えてさらに学生と卒業生間のコミュニケーションの機会を作っていく必要があると考える。

## 5.3 障がい児（者）を取り巻く社会への関心

本プロジェクトに参加した学生は、「子どもたちと関わりたい」「子どもたちは可愛い」と感じ活動への参加を楽しみながら少しずつ学びを重ねている。

地震や災害に加えて、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴って、普通の生活さえも困難な現状にある（鹿内 2020, 鹿内・村上・服部 2020）、しかし、非常事態以外でも困難な生活（教育を含めた）を送っている障がい者を有する対象児たちの生活や、取り巻く地域の社会資源などの現状にもより目を向ける活動としていく必要がある。

日本における障がい児（者）を支援する社会制度について、都道府県単位や各自治体でどのように整備される必要があるのか等、先駆的な活動を行っている地域の専門職と市民との活動等に実際に触れることで、地域包括ケアシステムの各地域での構築について考察する機会を増やしていきたいと考える。

## 6. おわりに

学生は、対象児への関わりを通じて、ケアの対象者を理解するために必要な知識に気づき、これから自身が学んでいく必要のある科目について具体的にイメージすることができていた。

また、プログラムへの準備からの参加によって、複数の学科の学生が学年を問わずに参加交流する機会となり、他学科の学生を対象児を観察する視点について自身と比較しながら学科ごとの強みについても考える場となり、専門職としての自身の将来の姿をイメージする機会にもなっていた。

本プロジェクトの学生に対する学びの効果を教員メンバーとも共有しながら活動を継続していきたい。



## 文献

医療的ケアが必要な子どもと家族が安心して心地よく暮らすために－医療的ケア児と家族を支えるサービスの取組紹介－，厚生労働省政策統括官付政策評価官室 アフターサービス推進室，平成30年12月。

厚生労働省：障害者の日常生活，及び，社会生活を総合的に支援するための法律，及び，児童福祉法の一部を改正する法律，

[https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/shougaisihakukushi/kaisei/kokuji\\_h30.html](https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaisihakukushi/kaisei/kokuji_h30.html)

厚生労働省：障害児支援の強化について / 発達支援の概要 (p.6-7)

[http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/shougaisihakukushi](http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaisihakukushi)

鹿内あずさ：在宅における児の発達支援 ～，こどもと家族のケア，日総研出版，12 (6)，pp.14-18，2018.

鹿内あずさ・村上優衣・小塚美由記・白幡亜希・笠見康大・服部裕子・福士晴佳・佐藤明紀：障がいを持つ在宅療養児への発達支援～スマイル・プロジェクト～，日本子ども学会，p.38，2019.

鹿内あずさ：北海道胆振東部地震から学ぶ ～災害時の対応と日頃の備え～，こどもと家族のケア，日総研出版，13 (6)，pp.27-32，2019.

鹿内あずさ・村上優衣・服部裕子：医療的ケア児と保護者の暮らし～新型コロナウイルスが拡がる中での不安や戸惑い～，こどもと家族のケア，日総研出版，15 (3)，pp.91-95，2020.

鹿内あずさ・村上優衣・笠見康大・小塚美由記・白幡亜希・佐藤明紀・服部裕子：障がいを持つ在宅療養児への発達支援プロジェクト ～A 大学5学科の学生と教員の活動を通して～，日本感性工学会 感性フォーラム in 札幌，2020.

北海道小児等在宅医療推進協議会の小児等在宅医療推進事業 <http://yell-hokkaido.net/>

村上優衣：小学校入学を控えて悩む保護者を支える！医療的ケア児の学校選択の悩みと課題，それを支援する専門職の活動，こどもと家族のケア，日総研出版，13 (6)，pp.90-94，2019.

村上優衣・鹿内あずさ・笠見康大・白幡亜希・小塚美由記・福士晴佳・服部裕子・佐藤明紀：障がいを持つ在宅療養児への発達支援～作業療法学生の学び～，日本子ども学会，p.38，2019.

村上優衣・鹿内あずさ・笠見康大・小塚美由記・白幡亜希・佐藤明紀・服部裕子：障がいを持つ在宅療養児への発達支援プロジェクト ～ミニ運動会における学生の学び～，日本感性工学会 感性フォーラム in 札幌，2020.

山北葵・小塚美由記・白幡亜希・鹿内あずさ：障がいを持つ在宅療養児への発達支援～栄養学科学生の学び，日本感性工学会 北海道支部 第7回学生会，2019.

## **Developmental Support for Children with Disabilities Living in the Community: Initiatives by Hokkaido Bunkyo University Teachers and Students**

SHIKANAI Azusa, KOZUKA Miyuki, MURAKAMI Yui, KASAMI Yasuhiro,  
SHIRAHATA Aki, HATTORI Yuko and SATO Akinori

**Abstract:** The Child Welfare Law was revised in 2016, and it is necessary to provide home care services for target children and their families, as well as "support for children's development" and "development of social resources necessary for the community" in schools and communities. Based on this necessity, this study aims to investigate the relationship between the students studying nursing, physical therapy, occupational therapy, child development, and nutrition at the university and children with illnesses and disabilities living in the area around the university or near the students' route to school (hereinafter referred to as "target children") for three years from 2017 to 2019. The purpose of this project was to enhance the children's awareness of their "potential" and to build on their own learning by engaging with them through events organized by the university and by visiting their homes. The students who participated in this project realized that, in addition to knowledge of diseases, knowledge of human anatomy, anatomy, physiology, etc., is necessary to understand the physical condition of the target child, and that knowledge of development and understanding of systems for life support are also necessary. In addition, it was suggested that the students were able to have a concrete image of the professional study they needed and the professional job they would have after graduation. This study was supported by a joint research grant from Hokkaido Bunkyo University.

**Keywords:** community, children with disabilities (persons), developmental support